

透析 家族意思で中止に

終末期の患者

重い慢性腎不全の患者が受ける人工透析について、日本透析医学会(理事長・秋沢忠男昭和大学教授)は、終末期の患者やその家族が望む場合には透析の中止や開始の見合わせも可能とする提言をまとめた。23日、札幌市で開かれた同学会総会で明らかにした。

医学会提言

国内で人工透析を受けている患者は約30万人いるが、70歳以上の開始が約半数と、高齢化している。終末期患者への透析のあり方が医療現場で議論になっているため、同学会は作業チームを設けて検討してきた。

体調が悪化し、医学的理由から安全に実施できない場合だけでなく、判断能力のある患者が自ら透析を拒否した場合や、自分では判断能力がない終末期患者でも家族が拒否した場合は、見合わせや中止の対象とする。医療側から見合わせや

中止を提案し、同意を得て行うこともあるとした。

手続きは、本人の意思を基本に医療チームが話し合っただけで決めるとした。2007年の厚生労働省の終末期医療指針に準じた。

患者や家族に、透析は生命維持に欠かせないことを理解してもらったうえで、文書で同意を得ることが必要とする。いったん見合わせ

せた後でも、体調が改善したり、患者や家族の意思が変わったりすれば、実施する。話し合いの内容はすべて記録する。

高齢者の終末期医療を巡っては、日本老年医学会が1月、胃ろうなどの人工的水分・栄養補給について「治療の差し控えや撤退も選択肢」との見解を発表している。

「最善の医療」に社会的関心



患者側の希望があれば透析中止も可能とする提言を日本透析医学会がまとめた背景には、食べられなくなった患者の胃に穴を開けて管で栄養を入れる「胃ろう」を含め、終末期医療のあり方についての社会的な関心の高まりがある。

新たに人工透析を始める患者は、進行した糖尿病による腎不全が4割を超え、

約半数が70歳以上だ。合併症を抱えた高齢の患者にとって、平均週3回、約4時間の人工透析は、体力的にも精神的にも負担が大きい。末期がんや進んだ認知症、意識のない患者では見合わせた例も報告されている。本人にとって最善の終末期医療とはどういうものなのか。社会的に議論を深める時期に来ている。

(医療情報部 藤田勝)